

エラスムス・ムンドゥス・マスタープログラム 「ユーロカルチャー」

2008 年 4 月よりエラスムス・ムンドゥス・マスタープログラム「ユーロカルチャー」の圏外協定校としての活動を始めたが、2011 年 10 月からはヨーロッパ圏外のフル・パートナーとして、他の 3 つの圏外協定校（メキシコ国立自治大学、インド・プーネ大学、米国・インディアナ＝パーデュ大学インディアナポリス）とともにプログラムの運営により深く関わることとなった。同プログラムは、欧州における高等教育機関同士の連携を強めるとともに相互間の流動性を高め、大学教育を国際化することを目的としており、英語を共通使用言語としている。ヨーロッパの大学のみならず、ヨーロッパ圏外の大学もパートナー校として参加しており、世界的な規模で展開されている最先端の教育プログラムであるといえる。本研究科は人文学分野における日本初めての同プログラム協定校となった。

国際連携室は、同室に設置されたエラスムス・ムンドゥス部門（EM 部門）、RA とともに、同プログラム運営を担当している（受け入れる学生および教員の宿舎の手配、ビザ申請、各種書類作成、シラバス作成、リーディング・テキストの選定・購入、本学からの派遣留学生の募集説明会開催と面接選考実施、本学からの教員派遣等）。例年 10 月～12 月の 3 ヶ月間、同コンソーシアムの学生最大 5 名を「特別聴講学生」として受け入れ、「世界の中の現代日本」をテーマとした英語による授業 5 科目を 10 回にわたって開講し、25ECTS（10 単位相当）を認定している。授業にはコンソーシアム所属学生以外の留学生や日本人学生も参加している。授業を行う際には双方向性を重視しており、各授業内においてフィールドトリップも実施している。また、毎年ユーロカルチャー・コンソーシアム大学の教員 1～2 名を受け入れ、適宜助言を得て、改善に努めている。さらには日本語教育の専門家および大学院生の協力を得て、日本語学習の機会を提供することにより、短期間にもかかわらず高い教育効果をあげている。本研究科は、同プログラムの 4 校の圏外協定校の中でも常に高い評価を得ており、これまでのところ、欧州側での派遣留学先として希望する学生が最多である。

2022 年度は、過去 2 年度コロナ禍の影響でコンソーシアムからの学生受入を停止していたが、同年度からこれを再開し、6 名の学生を受け入れた（そのうち、2 名が 2021 年度の受入予定が中止になっていた学生）。また、2023 年度～2025 年度の「ユーロカルチャーMA プログラム」（2 年間）への派遣（推薦）については、募集および学内で説明会を実施したが、応募者はなかった。ただし、2022 年度～2024 年度の「ユーロカルチャーMA プログラム」について、昨年度推薦した学生（NIIHIRO Kairi）が奨学生として採択され、2022 年 8 月から 2 年間派遣された。2022 年度、教員の従来も再開し、同年度はグローニンゲン大学（オランダ）（Marek NEUMAN 氏）およびパラツキー大学（チェコ）（Martin ELBEL 氏）からそれぞれ 1 名、計 2 名の教員を招へい研究員として受け入れた（ただし後者の教員は来日後負傷のため途中帰国）。それと伴い、Marek NEUMAN 氏の講演会を開催した。また、大阪大学からコンソーシアムへの教員派遣も再開し、2022 年度は教員 1 名（高安啓介教授）がグローニンゲン大学およびゲッティンゲン大学へ 2 週間派遣された（採用はすでに 2021 年度に決定していたが、2022 年度に延期されていた）。2022 年度、ユーロカルチャー・コンソーシアム校の担当者が集まって行われる全体会議（メネージメント・コミティー・ミーティング、MCM）がヤゲロン（ヤゲウォ）大学（ポーランド）で 6 月 29 日・7 月 1 日に行われ、本研究科から教員 2 名（バーデルスキー教授、モインウッディン助教）が参加し、プログラムの運営上の改善策や今後の方針等について集中的に審議した。その時、コンソーシアムからの受入予定の学生（6 名）と面談した。

（バーデルスキー マシュー）